

ハンセン病問題に関する事実検証調査事業 第24回検証会議(2日目)

宮古南静園 聞き取り(公開)

平成16年11月18日(木)

【事務局(加納)】 お待たせいたしました。それでは、第24回ハンセン病問題検証会議、第2日目を開催させていただきたいと思えます。

本日は聞き取りをさせていただきますが、聞き取りにつきましては、元宮古南静園園長でいらっしゃる、元琉球政府立宮古病院院長そのほかを歴任されていらっしゃいます現平良市長の伊志嶺亮さんより聞き取りをさせていただきたいと思っております。どうぞよろしくお願いたします。

【金平座長】 おはようございます。どうもありがとうございます。

今、司会のほうからご紹介いたしましたように、伊志嶺市長さん、大変お忙しい中をおいでくださいます、ありがとうございます。ただ、この園とも大変深いご関係もおありになりますし、また、現在行政のお立場もでございますので、幅広いお話を伺えるかと思えます。

大変恐縮でございますが、1時間ほど時間がございすが、30分ぐらいお話をご用意くださっておりますか。

【伊志嶺】 30分話せと言われれば、30分話しますけれど。

【金平座長】 とにかくみんなからもまた、質問という形でお受けいただくということだけしていただければ、あとは自由に融通のきく時間でございすがけれども、どうぞよろしくお願いたします。

【伊志嶺】 私、伊志嶺亮と申します。現在は平良市の市長をやっております。市長をやって11年目になります。その前は小さな町の診療所をやっておりました。

宮古南静園とのかかわりは、昭和二十二、三年ごろからでありまして、そのころは高等学校の学生でありました。うちのすぐ近くに教会がありまして、國仲寛一さんという牧師さんがいらして、この方は女子高等学校の校長先生もなさっていたんですけども、その方の教会に時々行っていました。信者ではなかったんですけども、聖歌隊に入っていて、毎週日曜日、あのころ米軍の司政官が宮古におりまして、その米軍のトラックを出してくれまして、それに乗って二、三十名ぐらいでしょうかね、毎週日曜日にここに参っ

て、國仲先生が話をなさって、そして私たちは聖歌を歌っておりました。

そのころは、宮古南静園はとても医療事情が悪くて、専門の医師もちろんありませんでした。あのころは、開業医の先生方が交代でといいますが、二、三カ月あるいは、半年交代くらいでしょうか、ここの院長という形で時々いらしているという状況でありました。治療はいつも来ているというわけじゃないこの院長と、それから入園者の中にも治療の手伝いをする人がおりました。また、後に医介補と呼ばれる人がおりました。それは戦争中に、例えば衛生兵であるとか、あるいは病院の薬局生みたいなのを何年かした人、それを、講習を受けて医師のかわりを務めさせるという沖縄独特の制度がありまして、その方がおられて、投薬などもしていたように思います。また、裏傷などの治療もその人たちがやっていたように思っております。

そして、昭和25年に卒業いたしました。大学は岡山の医学部に進みました。そのときは直接岡山大学に試験を受けたのではなくて、留学生という形で沖縄から何名が行って、そして私は本来ならば東京の慈恵医科大に配られたんですけども、そこはちょうど旧制と新制の切りかえの時期で、私の入る学年がなかったものですから、文部省が岡山に急遽配って、岡山に入って、それで31年に卒業して、1年間インターンをやりました。国家試験を受けまして、32年に医師の免許をもらいました。で、外科の教室に入ったんですけども、その当時沖縄には医師の数が大変少なくて、沖縄の医者の中で50名くらい沖縄戦で亡くなった方がおたりして、宮古もほんとうに悪い医療事情でした。そういう事情をよく知っていましたので、教授に2年間だけ沖縄に行かしてくれということで、お願いして宮古南静園へ参りました。

そのときには私の前に、留学生として行って、卒業して帰ってきていた人たちが、昭和29年ごろからでしょうか、勤めていまして、私はおそらく、戦後、卒業して帰ってきた学生、医者の中では4番目になろうかと思えます。私の前には真壁先生という先生がいらして、島尻先生、中村先生、私は4番目だと思っています。で、32年には医務課長をやりました。そして33年に園長になったわけなんですけれども、もちろん、トレーニングはほとんど受けてきていけませんので、治療らしい治療もできなくて、ほんとうに南静園に帰ってきてほとんど何も医学的なことはできないような状況で、大変入園者に済まなく思ったことを覚えております。

当時、家内がおられて、家内の父が市内で開業していたものですから、時々虫垂炎とか、そういう程度の治療は一緒にやっていたので、できることといたら虫垂炎かへ

ルニアの手術ぐらいじゃなかったかと思います。

そのころは、入園者もかなりおりましたけれども、やっぱり十分な医学的な治療はできなくて、そのころはやっぱりまだ、マラリアでありますとか、フィラリアとか、そういう病気が多かったような気がいたします。主にやっていたことは、入園者の、特に若い連中と一緒にバレーしたり、野球したり、相撲をとったりとか、そういうことが主でした。

そして、あのころの入園者の状況というのは、きのうもお聞きになったと思いますが、かなり作業療法と称して作業をさせたり、そういう状況でありました。それで、園長には大きな権力があって、いろんな司法的なこととか、そういうのも園長に任されているという状況であったんですが、私のときには幸いといいますが、入院者のいろんなトラブルは比較的少なかったんじゃないかなと思っています。

そして、その後保健所に移りまして、結局医者がいなかったんですね。それで、琉球政府の厚生局というところに行って、医局に帰らないといけないので、ぜひ僕のかわりになる医者を探して送ってもらいたいということを言ったんですけど、かわりの医者がもし必要なら、おまえ、自分で探していけと。おそらく厚生局でも、沖縄本島に住んでいる医者を宮古まで行けということと言えなかったんじゃないかと思うんですね。それで、無責任なことを言われまして、自分で医者を探しに、あのころはコザ病院というのがありまして、開放性の病院が今の沖縄市にあったんですけど、そこに行ったりしてお願いしたりもしたんですけど、なかなか宮古まで来てくれる医者がいなくて、結局岡山に帰れなかったんです。それで保健所に行きました。保健所から今度は1年ちょっとおりまして、伊良部の診療所に医者がいなかったものですから、また伊良部の診療所に行きまして、そこから宮古の園に行きまして、宮古の院長になりまして、その間は時々中部のコザ病院に行って、先輩の医師たちについて二、三カ月研修して帰るとか、そういうことはあったんですけども、ほんとうに何もできないで医者が続けていたような状況です。宮古病院の院長といっても医者が2人しかいなくて、主に結核の患者を治療しているところで、結核の病床が68でしたでしょうか、一般病床が20ぐらいで、私よりもっと結核について経験を積んでいる看護婦でありますとか、そういう人たちに習って結核の治療もしていたような状況であります。そのころは、頻繁に沖縄本島ユースカー(USCAR)というところ、軍政府なんですけれども、その軍医が来ていまして、そのアドバイスを受けながら治療も当たっているような状況でありました。

で、私と一緒に何人か、同級生も医学部に入ったんですけど、もちろん彼らはちゃん

としたトレーニングを受けるために行っているわけですから、私が宮古病院にいるときに、一緒にいた同級生がちゃんとしたトレーニングを受けて帰ってきて、彼と院長を交代することができて、ほんとうにほっとした覚えがあります。それで、開業しておりました。その間も、園にいるときの友人たちがたくさん園におりましたので、そういう人たちとずっと交流がありまして、あのころは少し、退園して自分たちで自立しようという人たちも何人かおったりして西表島の土地を借りて、そこで自分たちで自立できるようなことをやろうかというような、話し合いをしたりして、もしかしたら、あれが実現したらまた別のいろんなことができたかもわかりませんが、結局あれも実を結びませんで、ずっと入園している人たち、あるいは退園している人たちとも友達づき合いを今でもしております。

で、きのうも話があったと思うんですけども、あのころはスキンクリニックというのがありまして、宮古でも外来の治療をやっていたんですね。それもいい面もあったし、少し悪い面もあったかと思います。あれをやろうと言い出したのは、結局、そこに皮膚の患者に来てもらって、皮膚の患者の中からハンセン病をスクリーニングしていこうという趣旨でできたスキンクリニックだったんですけども、それで開業しているときも、それらしいのがあるとスキンクリニックに紹介するという状況があったわけです。

市長になって、いろんな行政のことも、少しかうやって何が起こっていたかということを知るにつけても、例えば戦争中に、ここには3万人ぐらいの日本軍の兵隊が来たんですけども、その兵隊さんが来る前はかなりハンセン病の調査をして、その調査には、やはりあのころは、平良市は平良町だったんですけど、平良町の職員も一緒になっている調査をして、ハンセン病で地方にいる人たちの強制入園について、かなりの部分を担ったと思っております。そういうことを思うにつけても、やっぱりこれから、在園している方々、あるいは退所した方々のことはしっかり行政も取り組んでいかなければいけないなと思っておりますし、特にまたこの南静園については、もちろん入所している人は最後の一人まで見ると厚生労働省も言っておりますけれども、今、実際には150人近いスタッフがこの園にはおります。で、この人たちが、ほんとうに10人になっても、20人になっても厚生労働省がこうやって認めてくれて、ここで園の運営ができるのかということとはかなり疑問に思いますので、これについても、南静園の将来構想についてはしっかり取り組まなければいけないということで、今、いろんな人たちと話し合いながら、それに取り組んでいるところであります。

私としては、今、宮古は長期滞在保養基地といえますか、観光が一番大きな産業なんで

すよね。ですから、寒いところの人たちを冬の間宮古島に来てもらって、長期滞在してもらって、そういう人たちが宮古で体を動かしながらサトウキビを刈る手伝いをしたり、あるいは地元のお年寄りたちと交流しながら、そういうことができるような事業を去年から始めております。ですから、そういう人たちをチェックする医療機関といいますが、そういう機能を持たせた機関としてこの園が利用できれば、あるいはこのスタッフもずっと宮古で仕事ができないかなということで、そういう方向に持っていければと思って頑張ろうと思っているところであります。取りとめのない話ですけど、これで一応終わります。

【金平座長】 ありがとうございます。そうすると、まだ学生のころからここにおいでになったんですね。

【伊志嶺】 そうですね。

【金平座長】 それじゃ早速、先ほど申しました質問の形でお答えいただけますでしょうか。

牧野先生。

【牧野委員】 どうも、光明園の牧野でございます。

いろいろお聞きしたいことがあるんですが、細かいことなんですけれど、スキンクリニックを開かれたと。で、そのよい面と悪い面とを言われていたんですが、よい面が、皮膚病の中からハンセン病をスクリーニングすると言われたんですが、じゃ、悪い面ってどんなことがあったんでしょうか。

【伊志嶺】 きのうもあったと思うんですが、スキンクリニックのことが地元紙によく載ったりするんですよね。そしたら、これはハンセン病の啓蒙のためにいろんな情報を流したりするんですけども、宮古が特別にらいの濃厚の地帯であるとか、あるいは宮古の中でも漁村のほうで濃厚であるとか、そういう情報が地元の新聞に何度も取り上げられたりして、いつでもそのスキンクリニックの情報が流れていくものですから、かなりハンセン病に対する恐怖心といいますが、そういうのを広げる結果にもなったかなと思ったりもしております。そういうものが、あるいは差別につながったりもしたことがあるんじゃないかと思ったりもしております。

【牧野委員】 ありがとうございます。岡山大学を出られたということで、岡山にはもちろん、光明園、愛生園、学生のころ、ごらんになりましたか。

【伊志嶺】 ええ、一番最初に行きました。あのころは光田先生が院長をしていらして、また、愛楽園にいらした先生方もいたりしてですね。

【牧野委員】 犀川先生？

【伊志嶺】 ええ。

【牧野委員】 その岡山の状況と宮古の状況とを比べて、さっきおっしゃった偏見・差別の問題、きのうも少し問題になったんですけど、宮古は少しおおらかではないかと言われているとか、どこに根拠があるんだろうとか、実際には先生、2つのところでごらんになって、どんなふうに感じます？

【伊志嶺】 もし園のことを言うんでしたら、愛生園に行って、ほんとうにこんなぐあいにたくさんのお医者さんがいて、入園の方々を診ていらっしゃるのかというのにまずびっくりしましたですね。それも、かなり高度な専門的な先生方が外科、内科といろんな科に分かれていて、宮古じゃ考えられないほどの治療があそで行われていることに大変驚きました。それから、いろんな待遇の面、それを見ても、あのころの宮古とは全く違ったような、昭和二十五、六年ですから、宮古はほとんど何にもないような園だったんですね。あそこに行って、あのような施設があるのかとびっくりしたぐらいです。

【牧野委員】 偏見はどうですか。

【伊志嶺】 偏見については、同級生とか、あるいは周りの人、これはもう極端に岡山が悪いと感じました。なぜ私が長島に行くのか、同級生もおそらく全然わからなかったんじゃないでしょうかね。と思います。

【牧野委員】 ありがとうございます。

【金平座長】 神委員、お願いします。

【神委員】 全療協本部で仕事をしております検証委員の神です。これまで宮古南静園には、宮古南静園の将来をどうするんだという委員会が、先生が中心になられて持たれておりまして、私も呼ばれて二度ほどこちらにお邪魔をしたことがありまして、先生とは何回か、その会議を通してお会いをしたことがあります。きょうはお忙しいところ、ありがとうございます。

今の私ども全国組織にとっても、あるいは厚生労働省当局にとっても、今最も重要な問題は、現在ハンセン病療養所13カ所に入所をしております人数は約3,500人、国民の平均余命表に基づいて10年先がどれほどの人数になるのか、あるいは15年後どうなるのかということを一応想定しながら、今後の療養所のあり方について今議論がようやく始まったところで、一番大きな問題に今直面しているということが言えようかと思うんです。将来に向けての推計ですけれども、今3,500人というふうに申し上げましたが、10年

後にはおそらく半分になる、そして15年後には3分の1以下になるのではないかと、おおむねそういう数字で推移をしておるとい認識に私どもは立っています。まず、入所者が少なくなるにしたがって、しかし厚生労働省当局は最後の一人まで面倒を見ると安易に繰り返言われていますが、療養所の入所者が現在の半分になり、3分の1になったときに、具体的に考えていきますときに、職員の定員がそれに比例をして減少していくのではないかと、あるいは予算も縮小していきだろう。最近はやりの言葉で立ち枯れ政策なんていう言葉があるぐらいで、入所者が少なくなれば人も予算もつかなくなる、自然に枯れていくのを黙って見ているという風潮がなきにしもあらず。そうすると、政府当局は最後の一人にまで面倒を見るといっても、具体的に今後どういうプロセスを経てそこに至るのが全く明らかにされていない、単なる言葉遊びにすぎないのではないかとという危機感を私どもは抱いておりまして、これから具体的にハンセン病療養所の将来を考えていくときに、例えばこの療養所は今百二十数人と伺っていますが、これが30人ぐらいになったときにどうなるかということを入所中の皆さん方は大変心配しております。全国の療友はみんなそのように心配しているんです。

先生が、もう数年前から宮古南静園の将来はどうあるべきかということ、あらゆる階層を網羅されて、代表の人たちをお集めになって、宮古島の中で唯一の国立の医療機関なので、宮古の島民のためにこの療養所を将来にわたって維持していく必要があるということをお述べになったことを記憶しておりますけれども、具体的にこの療養所の入所者が数十名になったときに、どのようになっていくだろうというふうに先生ご自身は想定されているのか。そして最後の一人にまで政府は面倒を見るといふに言っていますけれども、どういう経過をたどってこの療養所が存続し続けるだろうか。私どもが今考えておりますのは、一般の市民サイドをこの療養所の中にいろんな形で吸収して行って、この施設の維持運営に当たる、それ以外にはないのではないかとというのが大勢なんです。しかし、一方ハンセン病に対する偏見と差別と、療養所の将来のあり方を模索する問題と、車の両輪でありまして、私もよく立場上、北海道から九州までシンポジウムとか講演に歩くわけですが、そのときに、市民の人と対話をするときに、あんな療養所には死んでも行かないという高齢者がいるかと思うと、今日本の社会で大きな問題になっております高齢者の行き場所がない、社会保障が貧困なためにそうなっているわけですが、若いころ一生懸命に働いて、ふと気がつくと60、70になって、核家族化で、少子高齢化社会ともいえますけれども、家族構成が少ないので、昔は両親、祖父母の面倒は子や孫が見ていた。最

近では見る人もいなくなった、病院に入っても、おまえは高齢になっただけだということ  
で追い出される。そしたら高齢者は福祉施設に行くしかない、そこも満杯で4年、5年待  
たなくてはいけない。そういう行き場所のない高齢者の人たちを、ハンセン病療養所の中  
に吸収することによって、療養所というのは国民の共有財産でもあるわけで、国の貴重な  
予算によって運営されているわけですから、国民に平等に権利を分かつという観点から  
もそういう方向で進んでいくしかないのかなと、選択肢はたくさんあるにこしたことはあり  
ませんが、当面議論になっておりますのはそういう内容であるわけです。しかし、先ほど  
申しましたように、偏見がすごく強くて、地域性が多少ありますけれども、あんな療養所  
は死んでも行かないという人たちがいることも事実なので、車の両輪として両方の問題を  
あわせ考えていかないと、ハンセン病療養所の将来のあり方は健全な形では浮かび上がっ  
てこないのではないかとということも心配しております。

ちょっと長くなってごめんなさい。先般、私どもの全国組織の最高決議機関であります  
支部長会議を開いて、それぞれの療養所のあり方について、早急に議論をして青写真を描  
かないと、我々の平均年齢がもう77歳ですから、そういう将来の青写真を、能力的にい  
って描き切れない。そういう時代を迎えつつあるので、いつまでもこの問題を先送りにで  
きないという認識に立って、そういう議論をいたしました。早速、これは我々の問題とし  
て、我々が主体的に考えていくべきだという原則に立って、今月中ごろまでに、各支部  
ですべて、この将来構想を考えるための委員会を立ち上げようということを決定しまして、  
そこに向けて動き始めています。しかし、私どもだけで将来構想を描き切れるわけでもな  
い、知識とて十分ではない、能力とてしかりです。したがって、弁護士の先生、あるいは  
園長はもとよりいろんな人たちの知恵を拝借しながら、早急にそういう青写真を描かない  
と、この場所で言った厚生労働省の事務官がいますので言いにくいけれども、厚労省の思  
うつばになって、合理化政策の流れに乗せられていって、最後の一人まで面倒を見ると言  
うけれども、気がついたらよその療養所に転園せざるを得ない立場に追い込まれていたと  
いうことも起こり得る。したがって、今こそ我々が元気な間に、主体性を持った療養所の  
青写真を描こうではないかというのが今の私どもの直面している最大の問題です。

先生もその問題について深くかかわっていただいて、大変私ども、心強く考えておるわ  
けですが、ちょっとそういう観点から改めて先生のご見解なり、見通しなり、あるいは療  
養所を取り巻く地域社会の状況等について、ご見解をお述べいただくならばありがたいと  
思っています。



【伊志嶺】 まず、療養所の所在の自治体として一番思うことは、入所している方も市民の一人なんですよ。この園の今入所している百二十数名の方々、これをみとるための医療水準を落としてもらいたくないというのが今一番の大きな願いです。これについては、もし我々にできることがあれば、何でも国に対して言っていきたいなと思っております。そして、そのことが将来宮古で、これ、私たちは常々宮古南静園は宮古の宝なんだよということを言っておりますので、宮古のこの南静園をほんとうの地域の医療機関として活用していくためにも、それはぜひ必要だと思うんですよ。そして、それを続けていくためには、どういうことが我々としてできるだろうかということ、将来構想を検討委員会の中では話し合っていかなければならないと思っております。

宮古の場合は幸いといえますが、とても地域との交流がほかの園よりはおそらくスムーズにいつているのではないかなと思うんですよ。ですから、まず地域としっかり交流できるようなシステムづくりといえますが、この間は園の社会化をやっていこうじゃないかということで、ここでフリーマーケットをやったり、それから、デイサービスとか、いろんなものをここでできるようになったらいいなということ、話し合ったりもしたんですけども、とにかくみんながこの地域の施設だよということを強く地元でやっていくことが、今やっぱり残っている偏見にもつながっていくんじゃないかなと思っております。ですから、地域の宝として使える医療施設として、将来ここが継続していけるように、そうすればおそらく最後の一人になるまで、この地で入園の方々が過ごせるという思いがしますので、これについてしっかりと地元で取り組んで、国にも要請していきたいなと、そのように思っております。

おっしゃいますように、ほんとうにこれは急を要することなんですよ。高齢化も相当進んでいますのでね。ですから、今市町村合併が進められておりますけれども、新しい自治体になっても、ぜひこれは宮古全域で取り組んで、そのようにしていきたいと思っております。先ほどもちょっと申しましたけれども、地元で使うだけではなくて、外から宮古に来てもらう人たち、その健康のチェックでありますとか、そういうことができるような、そういう施設であればいいなと思ったりしていますので、例えば透析をする人たちが安心して来れるような施設であつたらいいなとか、どういう方向かわかりませんが、そういうぐあいに地元で頑張っていきたいと思っています。

【金平座長】 それでは、宇佐見さんのほうからも。

【宇佐美委員】 私は長島愛生園の入所者で、宇佐美と申します。先生、どうもありが

とうございます。

私も、この検証会議の検討委員として、西南諸島の奄美とか沖縄、そしてこの宮古の施設を回らせていただいて、一番印象に残ったのは、ハンセン病の裁判の後に、社会復帰した大部分の人が、この西南諸島、特に沖縄県とか奄美、そして鹿児島の人々が大部分であると、300人以上であると、あとの人が少ないということございまして、どうしてそんなふうになったかという、病気のこの関係もありましようが、やはり入居者の子供さんが多い。ほとんど、長島愛生園は現在358名で、今年28名の人間が死んでおりまして、今年もわずかですけれども、ふるさとに帰る人もおりますけれども、ほとんどが、引き取りに來られなかったというのが大部分ございまして、そういう面で、沖縄だとか奄美の人たちの大部分は子供さんがおると、そして子供のために一生懸命になって生活して頑張ろうという気持ち、きょうも先ほど不自由者の方々のお話を聞いても、子供さんのために闘ったという、一生懸命生き抜いたというのが大きな生きがいになっておられるんじゃないかということを感じるのでございまして、ハンセン病に対する断種・墮胎の強行がいかにか人間の生きがいを失ったかということを実感させられておりますけれども、先生がこれからハンセン病のあとの問題について考えていただくときに、やはり人間は一人の人間として、女性として、母として、父として、生きがいを持っていける社会ということを取り取らないような社会に、先生、これからまたいろいろと行政のために頑張りたいと思いますけれども、そういう面について、特に長島愛生園とか、本土の墮胎・断種を強行した園と西南諸島との違いというなものについてのお考えはございませんでしょうか。あればお聞かせ願いたいと思います。

【伊志嶺】 園の周辺といいますか、宮古では宮古出身の入所者の方々がたくさんおられて、これらが絶えず出入りしていい関係を持っているという家族もたくさんありますし、それはやっぱりそうでないものもいるんですけど、そういう面では、宮古南静園は少しはよかったかなと思います。例えば、きのうの与那覇次郎さんの話でも、逃げて行って、子供を産む場所があったということですね。そういうところがあったという面では、少しはほかの園と違っているところがあるかなと思っております。そういうあたりが、少し偏見といいますか、そういうものの差もあるかなと思っております。しかし、やっぱり宮古でもそういう事実はありましたし、あまり宮古でもきれいなことは言えないんですけども、このことで苦しんでいらっしゃる入園者、苦しんで亡くなっていった入園の方々もたくさんいるということを私もよく知ってますので、宮古だけがいいんじゃないと思って

います。

【宇佐美委員】 もう一つ、お尋ねいたします。先ほど神さんが言いましたように、日本のハンセン病の患者も感染源ではなくなっておりますけれども、3,000人あまりの者も早急に亡くなるわけでございますけれども、この日本のハンセン病の政策の誤りを、今検証委員会をやっておりますけれども、今までの中で、先生も宮古のお医者さんとして、日本のハンセン病政策の中でどこに問題があったかということ、もし考えておられたらお聞かせ願えればありがたいと思うんですが、どうでしょうか。

【伊志嶺】 日本の医療の、今欠点といいますか、先輩、後輩といいますか、そういう徒弟制度のようなところがありまして、おそらく園でも、例えば先輩の先生方の言うことはなかなか反発できないというようなこともらい学会の中でもあったのではないかなと思います。そういうことがおそらく、いろんなことがわかってきても、強く声を上げられない先生がいた現実があるんじゃないかと私は思っています。これは、まだ復帰前の琉球、沖縄から見た場合にはそういう思いがして、この日本の医療制度といいますか、そういうものの弊害が、例えば国が謝罪するのをおくらせた大きな原因でもあったんじゃないかなという思いがいたします。

【宇佐美委員】 どうもありがとうございました。

【内田委員】 内田と申しますけれど、2点ご質問させていただきたいと思うんですが、先ほど、先生、医学部で勉強されたというご紹介をいただきましたけれども、医学部教育において、ハンセン病というのが正しく教育されているかどうかというところ。私は医学部にたまに行ってお話をするところがあるんですが、医学部教育というのは根本的な問題があるんじゃないかという気がいつもするんですね。ハンセン病についてもきちんと教育されていないんじゃないかという気がするものですから、お尋ねをさせていただきたいと思うんです。根本的に問題があるとすれば、どうして問題があるのか、それはどうしてその長きにわたって是正されていないのかというところをいつも思うんですけれど、その点について少しお話を聞かせていただければというのが1点目。

【伊志嶺】 先ほども少し言いましたけれど、医学部の中では学生にはほとんど、このハンセン病についての正しい講義といいますか、ちゃんとした講義がなされなかったと思っております。そして、これについても、医学部のある大学でもかなり温度差があって、教授自体によってかなりの温度差があったんじゃないかなと思っております。例えば京都とかそういうところはかなり力を入れて進んだような教育をしていたように思いますけれど

ども、岡山は長島の近くにあっても、私の印象ではそれほどのしっかりした、先輩にもちゃんとハンセン病の療養所に行った先輩方もいらして、一生懸命なさっている方もよく知ってはいるんですけども、学校としてはどうだったかなという気がするんですよ。これは、例えば、こんなことを言ったらあまりよくないかもわかりませんが、光田先生があまり偉過ぎたんじゃないかなという気がします。そういう思いがします。

【内田委員】 繰り返して恐縮なんですけれども、医学部の学生たちとかも、医学部の教授たちにお話をしまして、今まで医学が犯した過ちについて、どの程度教育をしているかということ、ほとんどそれをしていないというお話を聞くんですね。その点いかがでしょう。

【伊志嶺】 医学教育が過ちを犯した例がたくさんあるというのはおっしゃるとおりですけども、これは日本の医学生教育、これに根本的な問題があったんじゃないかなと私は思うんですよ。ほかの国ではかなり現場主義のところがあるんですけども、日本の医学教育の中では、こういうのがほとんど顧みられなかったという面が大きいと私は思っています。

【内田委員】 もう一点、お聞かせいただきたいんですけど、保健所の問題で、戦後、地域医療ということを考えたときに、保健所というのは非常に大きな役割を担っているんだろうと思うんですね。ところが、無らい県という形でハンセン病について差別・偏見を非常に助長したり、蔓延さすとか、定着さすということについて、保健所は非常に大きなマイナスの役割を果たしたんだと思うんですね。で、これから差別・偏見を是正していくためには、保健所はそれを反省してというんですか、総括して、それを克服する、無らい県を上回るような差別・偏見の是正のための運動を保健所が担い手となって展開していく必要があると思うんですが、あまりそれはされていないなど。全国の自治体を見回しても、保健所がハンセン病の差別・偏見のために立ち上がってプログラムをつくってやられているとか、あるいは保健所の職員の方について、そういう研修プログラムというのが必ずしもなされていないような気がするんですけども、先生、自治体の責任者として、その辺いかがでしょうか。

【伊志嶺】 これはおっしゃるとおりで、保健所そのものは、結核についての関心度とハンセン病についての関心度は全然違いますよね。しかし、これを厚生労働省主導でやるのか、あるいは県の保健福祉部主導でやるのか、そういうのを考えると、ちょっと暗い思いがします。というのは、保健所と個人の資質にもよると思うんですけどね。ですから宮

古では保健所というより、もっと宮古の中の医療の横の関係というのは、宮古でトライアスロンというのが4月にあるんですね。これは宮古の全部の医者が一緒になって、ボランティアになってそれらの選手を支えるんですけど、そのマニュアルづくりの中でいろんな横の連携が生まれて、業種の面だけではなくて、いろんな連携が生まれています。ですから宮古の場合でしたら、そういう組織の中でやるほうがかえっていいんじゃないかなと思っています。宮古の医師会も、戦後すぐにらい撲滅運動というのをやったりして、これは大いに反省するべきであるし、また償うべきだと思ってますので、ぜひ宮古圏域として宮古の場合はやっていければと思っています。

【金平座長】　　じゃ、森川委員、どうぞ。

【森川委員】　　少し質問させてください。伊志嶺先生が南静園をやめられて、宮古保健所についたときに、これは何年ですか。

【伊志嶺】　　昭和34年です。

【森川委員】　　このときに、宮古保健所でハンセン病の投薬をしていましたか。

【伊志嶺】　　実は、南静園の薬剤の管理がとても甘かったんです。ですから、子供が2人来たりしている場合には、園から薬を盗んできて、断ってもらってきたんですけど、おそらく記載はどうなったかわかりませんが、そのころはそういう制度はありませんでした。とってきて、あげていたというケースはあります。

【森川委員】　　これは、伊志嶺先生が個人的にやって……。

【伊志嶺】　　そうですね。そういうシステムづくりはまだできていませんでした。

【森川委員】　　関連してなんですけれども、その後、伊良部の診療所に移られて、そこでもハンセン病の患者さんを診察したことはありますか。

【伊志嶺】　　ええ、診察したら、そのときにはスキクリニックでありますとか、園に紹介する、そういうことをしていました。

【森川委員】　　スキクリニックができるのはもっと後ですね。

【伊志嶺】　　もっと後です。

【森川委員】　　それまでは、南静園でも外来で投薬をしていたと。

【伊志嶺】　　そうです。あとは園の判断に任せていたという状況です。ただ、もしかしたら投薬をしていたケースもあると思います。というのは、私は開業してからも、ほかの患者さんにも投薬をしたことがあります。これは南静園の薬の管理のまずさを言って悪いんですけど。

【森川委員】 伊志嶺先生、外科の専門的な訓練をされてきた……。

【伊志嶺】 ほとんどやっていないです。ほとんどやることはできませんでした。

【森川委員】 外科では。ハンセン病の勉強というのはどうやってされたんですか。

【伊志嶺】 これはもう、独学といいますか、園に厚生省の派遣医が次々においでになりまして、いろんなことをなさったり、指導したりしたんですよね。そういう人たちにたくさん習うことが多かったです。

【森川委員】 もう一つだけなんですけれど、南静園で伊志嶺先生が園長のときに、患者さんが発生したとか、患者さんが逃走したとか、そういう場合、保健所とか琉球政府と連絡をとり合っていましたか。

【伊志嶺】 そういう覚えは全くないんですよ。

【金平座長】 ほかに何かございますか。

大塚委員、どうぞ。

【大塚委員】 大塚と申します。市長、先ほど、南静園は宮古の宝という言葉をおっしゃいましたけれど、そういう思いというのを市民の方々に広げていくために、子供たちにもそういう思いを何らかの形で訴えていくということが必要かと思うんですが、市立の小中学校の授業の中でとか、そういうところで南静園との交流というようなこととか、具体的に何か行っていることがあれば教えていただきたいんですけれど。

【伊志嶺】 実際には私がこうしようよと言ってやっているケースはありません。ただ、いろんな先生方が、例えばここの納涼祭りにいろいろな子供を連れてきたりというケースはたくさんあります。これはぜひやったほうがいいと私も思っています。

【牧野委員】 今の問いにちょっと関連して、先ほどお話の中で、地域の交流がよくいっている、全国の中でもいい園だろうと、こういうことを述べられておりまして、フリーマーケットと、それからデイサービスをやられたんでしょうか。

【伊志嶺】 いや、やったらどうだろうか、そういうぐあいにして園を社会化するとうう、そういうのに役立てたらどうかという話をしたことがあるということです。

【牧野委員】 ああ、そうですか。私たちもほんとうに、園の社会化ということを目指して頑張っているんですけれど、まだフリーマーケットとかデイサービス、こういうのはなかなか遠いものがあるんですけれど、もしやったんだったらどうかと、どんな状態だったのかなとちょっとお聞きしたいなと思ったので、まだやっていないわけですね。

【伊志嶺】 それに近いようなことは、支えている人たちがここに来て、いろんな、一

緒にやっていますので、女性の会があるんですけど、そういう人たちがやっています。

【金平座長】 私もよろしいですか。私も今の話の続きですが、たまたまこちらにボランティアの仲間がおりまして、せっかく来ましたのでおととい会いまして、ゲートボールのこちらのチームとしょっちゅうやっているんだと。それからある友達は、少し高齢の方でしたけれども、大変ここと積極的な交流があると、もう何年もやっているよというふうな話を聞いてここに参りましたけど、何かこれは、もちろんこちらに参りましてから、自治会長さんなんかはその裏づけを伺いました。で、それもきのう、きょうじゃないようなので、市長としてご就任になって、さっき11年とおっしゃいましたか、3期目でございますね。やっぱり市長としてそういう、特にこのハンセン病療養者と市民というふうなものをつなぐということを、市政の方針の中に何かお入れになったその結果なんですか。

【伊志嶺】 いえ、施政方針の中ではそういうことは言っていないんですよ。ただ、市長になる前から、例えば俳句の交流とか、それから囲碁の交流とか、そういうのをどうだろうかという話はしたことがありますし、また、園の方々を市の老人クラブに入れたいするのどうだろうかと、橋渡しはしたりはしていましたけれども、施政方針の中に、そういうのを進めていこうということではなくて、南静園の将来構想をきっちりやろうというのは……。

【金平座長】 これはもう、はっきり言って、市長個人というよりも、市としての方針でございますよね。そうすると、これはやはり市民の方も、ここに、地元以南静園があるという、この歴史の中で自然に交流というふうなものがだんだん広がってきた。やっぱり私が聞いたわずかな経験ですと、非常にどんどんそういうのが広がっているよということで、地元としては大変近い関係だというふうに話してくれた人は、それをやっぱりこの島の特徴として挙げて、しかも誇りだと言っていたんですが、やっぱりそれがなかなかよそのところでそういえないところもあるし、もちろん13園回ってみまして、ゲートボールと一緒にしたというのを聞いたのはあまりないけれども、おそらく聞かなかただけで、あるかもしれませんし、そういう方向にはいっているんでしょうけれども、ここに繰り返し訪れる、こちらの方が市民のほうに同じ目的、共通の作業ということで何かやるというふうなことは私もいいんだろうと思うんですが、やっぱり市長がこのハンセンについて非常にご理解があるでしょうから、その結果があるならば、個人じゃなくて、市の市政としてあるかなと思いましたがけれど、大分、市長さん個人のお力が大きいんでしょうかね。

【伊志嶺】 市としてももちろん、これは老人クラブの勧めで行っておりますし、また、ほんとうに喜んで老人クラブの集まりでありますとか、ゲートボールはもちろん、市で敬老会をするんですよ。そういうときにも園の人が来て、踊りをしてもらったり、いろんなことをやったりしています。おそらく、ゲートボールなんかは宮古代表として本島まで行ったりしているケースもあるんじゃないかと思います。

【金平座長】 訓覇委員、どうぞ。

【訓覇委員】 今、市長さんとして、この南静園とどういうふうにというお話がちょっとあったんですけども、やっぱり僕たちもこういうハンセン病問題ということに向き合っていこうと思うときに、どうしても退所者という存在をずっと見落としてきた。当然入所の方が抱えておられることとは違う苦勞というか、ハンセン病ということをはなかなか言えないという、わかった上でお互いがどうつき合うのかということとはまた違う苦勞を抱えておられる。きのうここで証言していただいた知念さんも、やっぱり退所者として、なかなか退所者の会がうまいこと取り組んでいけない部分もあるというようなお話をされておりましたが、特に市政の責任者として、南静園との開放ということと、新しく1つ課題として、たくさん退所者がいらっしゃる、そういう方のこれからの人間回復というか、そういうことについて、具体的に、市長さんの個人ということでも結構なんですけれども、お考えになっているようなことがあったらお聞かせいただきたいなと思います。

【伊志嶺】 退所した人たちもわりとばらばらだったんですよ。だけど、あの判決があった後で、みんなかなり元気になりまして、今、退所者の会員のようなのが、今市民会館の一角に事務所を置いているんですけども、いわゆる市民活動といいますか、社会性といいますか、それがやっぱり足りないところがあるものですから、なかなか自分たちで運営していくというのがかなり難しいような状況でありますので、これはかなりの部分でサポートしなければ、退所者の会の事務所そのものを運営していきづらいところがあるんですよ。ただ、市が金を出してこれらのコーディネートをしてくれる人を雇うだけの金がないものですから、これは今やっていないんですけども、ボランティアの方々といいますか、意識のある人たちが支えていますけど、まだ完全にいってるとは思っていない。

【牧野委員】 最後に1つ聞いていいですか。

【金平座長】 どうぞ。

【牧野委員】 最後ですか。



【金平座長】 最後です。

【牧野委員】 最後に1つ厳しい質問をしますが、光田先生が偉過ぎたと、こういう発言をされましたが、どこがどのように偉かったのでしょうか。

【伊志嶺】 おそらく愛楽園の中で、光田先生がこうやろうとおっしゃる場合に、かなりそれに反対する意見を申し述べるのが難しかったんじゃないかなと思うんですよね。この園ができたのも、光田先生が西表で園をつくろうという運動をなさって、西表に行つて、あそこで箆旗で追いかけて宮古に来て、宮古選出の町長が仲宗根勝米さんというクリスチャンだったんですけれども、その人の口ききでこの場所が提供されたと聞いているんですよね。そんなぐあいに、光田先生は自分の思ったことをこうやって一生懸命自分の信ずるままにしてきた方ということは、後輩の先生方もよく知っているものですから、なかなか言いづらい面がいろいろあったんだろうと私自身は理解しています。

それは、この療養所の運営の面だけではなくて、もしかしたら医学の面でもそういう面があったんじゃないかなという思いがするんですよね。

【牧野委員】 ちょっと失礼かもしれないけど、自分の信じる道をやりさえすればいいんでしょうか。それと、後輩から意見を言えないような雰囲気をつくれれば偉いと、そういうふうには……。

【伊志嶺】 偉いというのは、そう……。

【牧野委員】 どうもありがとうございました。

【金平座長】 時間が来てしまいました。よろしゅうございましょうか。何か非常に、光田先生の話になりましたけれど、宇佐美さん、よろしゅうございませうか。

それでは、伊志嶺市長、どうもありがとうございました。ほんとうにお忙しい中を。(拍手)

【伊志嶺】 たくさん言い足りなかった面もあるような気がしますし、また、少し宮古にさも全く差別がないような言い方になったかもわかりません。そうではない、どろどろしたものもあるんですけれども、しっかりみんなで取り組んでやっていきたいと思っています。

【金平座長】 おそらく、きのうも証言がいろいろございましたけれども、やはり当然それはやっぱりあるんだと、差別はあるんだというお話もございましたので、きょうは時間がなくなりましたけれど、最後に、どろどろしたものもあるけれども、それを越えていきたいというお言葉でございますね。

どうもありがとうございました。(拍手)

ほんとうにお忙しい中、ありがとうございました。

昨日の検証会議が終わるところで、少しおしまいのような話をしてしまいましたけれども、きょうは、今回の検証会議はこれをもってほんとうのお開きになるのでございますが、何かこの際話しておこうということはございませんでしょうか。何か運営についてでも構いませんが、あと、今後の日程については、各委員はもうご存じでございましょうから、ここでは繰り返さないことにいたしますが、よろしいですか。

じゃ、ほんとうに昨日からきょうにかけて、いろんな、また、この園ならではのお話もいろいろと聞かせていただきました。今後、もう既に、いろんなそれぞれの専門の分野でご執筆になっている方の中にも、今回の検証会議の中からまた新たな事実として書き加えるということもあるいはあるんじゃないかと思いつながら私も聞いておりましたが、いずれにいたしましても最後のまとめに向けて、各委員の方たち、お忙しい中ですが、最後の努力をしてまいりたいと思いますので、よろしく願いいたします。

最後に、園長先生、それから自治会会長さん、最後までおつき合いくださいましたけれども、ほんとうにいろいろご配慮いただきましたことを感謝申し上げて、この会を終わりたいと思います。ほんとうにどうもありがとうございました。(拍手)

園長先生、何かお話ございますか。よろしいですか。

【比嘉園長】 いろいろとどうもありがとうございました。

了